

猪甘と角笛: 考古資料による比較検討を中心として

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 基峰, 修 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/47304 |

猪甘と角笛

— 考古資料による比較検討を中心として —

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
基 峰 修

要旨

猪甘は、「猪飼」とも書かれる。古墳時代(4～6世紀)に、猪(豚)の捕獲と飼育を行っていたものの呼称である。古墳時代の野生猪と家畜豚は、その区別が難しいため、本論では、「猪(豚)」と包括して呼ぶ。

猪甘の考古学研究では、猪形埴輪がその対象として扱われてきた。また、角笛は、音楽史では日本への伝播はないものとして扱われてきた。しかし、大阪府昼神車塚古墳から、猪形埴輪とともに、角笛をもつ人物埴輪が出土している。

本論では、(1)猪狩猟を表す人物埴輪、(2)角笛をもつ人物埴輪、(3)装飾古墳の狩猟図、(4)高句麗壁画古墳の狩猟図と角笛図、という考古資料による比較によって、その共通点と相違点を明らかにして、猪甘の特性と角笛の性格及び系譜についての検討を行った。

猪(豚)の捕獲方法は、高句麗では騎馬スタイルで弓矢を使用するが、古墳時代の日本では、当初は弓矢と猟犬のみを使用し、猟犬の有無が、相違点として指摘できた。一方、角笛は、高句麗では大角笛が、軍楽器ないしは狩猟用として使われていたことが理解できた。

検討の結果、昼神車塚古墳の角笛埴輪は、「猪甘の角笛」であることを指摘した。角笛の系譜は、朝鮮半島に求められると考えられるが、猪甘については、馬飼や鷹甘(飼)とは、渡来の時期や系譜と要因、定着の仕方が大きく異なることが指摘できた。

キーワード

猪甘(飼)、角笛、猪(豚)、猪狩猟、渡来文化

Ikai and Horns

—Focusing on Comparative Analysis of Archaeological Materials—

KIMINE Osamu

Abstract

Ikai (猪甘), also written as “猪飼,” is the name of the people who captured and raised wild boars (pigs) in the Kofun period (4th-6th century). Since it is difficult to distinguish between wild boars and domesticated pigs in literature from this period, this paper will refer to both as “boars (pigs)”.

Boar-shaped *haniwa* have been the target of archaeological studies on *Ikai*. Additionally, its horns have been treated in music history as items that have never been introduced into Japan. However, a human-shaped *haniwa* holding a horn has been excavated along with a boar-shaped *haniwa* from the Hirugami

Kurumazuka kofun in Osaka Prefecture.

In this paper, I compared the following archaeological materials: (1) a human-shaped *haniwa* depicting an *Ikai* hunting, (2) a *haniwa* of a person holding a horn, (3) an ornamental image of hunting in a decorated kofun, and (4) images of hunting and horns in a Goguryeo kofun wall painting. I explained their similarities and differences, and analyzed the traits of *Ikai* and the nature and genealogy of the horns.

The method for capturing boars (pigs) in Goguryeo involved horse-riding and using a bow and arrows, but in Kofun-period Japan, only a bow and arrows and hunting dogs were used, and I indicate this as a difference. On the other hand, after examining the horns, I emphasized that most of the horns in Goguryeo were large horns, and they were used as both military musical instruments and as a tool for hunting signals.

The results of this analysis indicate that the horn *haniwa* at the Hirugami Kurumazuka kofun was an “*ikai* hunting horn.” It is thought that the horns in Japan come from the Korean Peninsula, but *Ikai* was significantly different from Umakai (horse breeding) or Takakai (capturing and raising hawks) in the following ways: time and factors causing immigration, genealogy, and the manner of establishment of culture.

Key words

Ikai, horn, boar (pig), boar hunting, culture introduced from overseas

1 はじめに

猪は、アジアからヨーロッパにかけて生息し、早くから狩猟の対象として扱われてきた。日本では、縄文時代から捕獲され、その身は食料、牙などは装身具として利用されてきた。縄文時代には、猪の装飾が施された土器や猪を表した土製品などがある⁽¹⁾。

猪甘は、「猪飼」とも書かれるように、4～6世紀の大和王権を中心とした古墳時代社会において、猪（豚）の捕獲や飼育を専ら行っていたものの呼称と考えられる。その用語は、『日本書紀』や『古事記』などの文献史料に由来する。本論では、文献史料に準じて「猪甘」と記すが、古墳時代の猪及び豚に関しては、野生である猪と家畜化された豚との区別が難しいため、明確な区別を行わずに「猪（豚）」と包括して論を進めることにする。

猪甘の研究は、朝鮮半島からの渡来人と考えられてきた猪甘を、瀧川政次郎が、その出自を肥人や隼人（九州地方の住民）に求め、華南地方（中国南部）伝来の家畜化された豚の飼育を行っていたことを指摘したことが先駆けといえる⁽²⁾。考古

資料を対象とした研究では、井辺八幡山古墳（墳長88.0mの前方後円墳・6世紀前半・和歌山県和歌山市）の発掘調査を実施した森浩一が、出土した猪形埴輪や、猪小像が付いた須恵器装飾付器台の考察にあたって、中国大陸の北方系民族との関係などを考慮して、猪甘は東アジア全体の中で考究すべき課題であることを示した⁽³⁾。

近年の考古資料を対象とした古墳時代の猪（豚）に関する研究は、出土獣骨の形態分析や、DNAなどの科学分析⁽⁴⁾のほか、猪形埴輪がその対象として扱われてきた⁽⁵⁾。猪形埴輪は、馬・犬・鹿・猿などの動物を表した動物埴輪の一種である⁽⁶⁾。猪（豚）や鹿を表した動物埴輪は、狩猟の場面を再現した獲物として考えられ、狩猟に関する研究の一環としても扱われてきた⁽⁷⁾。

猪形埴輪に伴う人物埴輪の出土が確認されている近畿地方の昼神車塚古墳（墳長56.0mの前方後円墳・6世紀中頃・大阪府高槻市）⁽⁸⁾では、人物埴輪の手に角笛が握られている。角笛は、その名称のとおり、牛や羊などの動物の角を利用した笛で、角を意味する「Horn」と呼ばれる楽器の一種でもある⁽⁹⁾。角笛は、音楽史では、「気鳴型管楽器」として取り扱われ、早くからヨーロッパな

どで親しまれ、狩猟や戦闘の笛としての性格を有するものと認識されてきたが、日本への伝播はないものとして扱われてきた⁽¹⁰⁾。

考古資料を対象とした角笛に関する検討は、岡崎晋明による昼神車塚古墳出土の角笛埴輪が、狩猟に用いられた道具を表したものであるとの指摘⁽¹¹⁾のほかに、塚田良道による軍楽器としての指摘がある。考古資料を対象とした角笛及び太鼓の分析を行った塚田良道は、中国・朝鮮半島（高句麗壁画古墳）との資料比較から、角笛を吹く人物埴輪と太鼓を演奏する人物埴輪について「武装軍団に関係する軍楽隊の一員」であるとの見解を提示する⁽¹²⁾。

以上のような研究状況をふまえると、考古資料を分析対象とした猪甘の研究は、森浩一による指摘以降、ほとんど取り扱われることが無かったと言っても過言ではなく、研究の進展がなされてこなかったことが理解できる。角笛に関する研究も、検討資料に限りがあるため、ほぼ同様の状況といえる。よって、ここに分析及び検討を行う価値を見いだすことができるといえよう。

本論では、猪狩猟を表した人物埴輪や、昼神車塚古墳から猪形埴輪や犬形埴輪などに伴って出土した角笛をもつ人物埴輪、装飾古墳で描かれた狩猟図の検討を中心に、角笛の系譜や、猪甘に関する考察を進めていきたい。本論での検討方法としては、まず、猪甘に関連する文献史料を紹介したうえで、考古資料を中心とした検討を行い、その結果にもとづいた比較検討を行い、結論を導き出したい。

考古資料の検討にあたっては、(1)猪狩猟を表す人物埴輪、(2)角笛をもつ人物埴輪、(3)装飾古墳で描かれた狩猟図の検討を行ったうえで、(4)朝鮮半島の高句麗壁画古墳で描かれた狩猟図や角笛図との比較検討を通じて、その共通点と相違点を明らかにすることで、猪甘の特性を追究するとともに、角笛の性格とその系譜を明確にしたい。

2 史料記述の紹介

まずは文献史料⁽¹³⁾から、猪甘に関連する主な記述を抜粋して紹介し、考古資料を中心とした検討の一助としたい。

まず、日本最古の正史である『日本書紀』（舎人親王等撰、養老4（720）年完成）⁽¹⁴⁾に、次のような記述がある。

[史料1] 卷第4・安寧天皇11年正月条

立大日本彦耜友尊為皇太子也。弟磯城津彦命是猪使連之始祖也。
おほやまとひこすまとものみこと ひつぎのみこ
 （大日本彦耜友尊を立てて皇太子とすたまふ。
おとしきつひこのみこと いそかきつひこのみこと
 弟磯城津彦命は、是猪使連が始祖なり。）

史料1では、大日本彦耜友尊が皇太子となり、その弟の磯城津彦命が、猪甘部を管掌する伴造であったことが記されている。この記述からは、猪甘が、天皇の配下に直属する部でありえたことが十分理解できる。

[史料2] 卷第11・仁徳天皇14（326）年11月条

為橋於猪甘津。即号其処曰小橋也。
みかひのつ はしわた すなは ところ なづ をばし
 （猪甘津に橋為す。即ち其の処を号けて小橋と曰ふなり。）

史料2の猪甘津は、地名と判断でき、猪甘が住んでいた地域であった可能性が高いといえよう。猪甘津は、現在の大阪市生野区の平野川の東岸付近と考えられている。

[史料3] 卷第29・天武天皇13（684）年12月条

己卯、大伴連……（略）……猪使連……（略）……
 ……布留連五十氏、賜姓曰宿禰。
きぼう おおともむらじ みかひのむらじ
 （己卯に、大伴連……（略）……猪使連……（略）……
ふるむらじ うち かばね たま すぐね
 ……布留連、五十氏に、姓を賜ひて宿禰と曰ふ。）

癸未、大唐学生、土師宿禰甥・白猪史宝然、及百濟役時没大唐者猪使連子首・筑紫三宅連得許、伝新羅至。則新羅遣大奈末金物儒、送甥等於筑紫。

きび もろこし がくしゅう はじのすくねをい しむのふびと
 （癸未に、大唐の学生、土師宿禰甥・白猪史宝然、及百濟の役の時に大唐に没められし者、猪使連子首・筑紫三宅連得許、新羅に伝ひて至り。則ち新羅、大奈末金物儒を遣し

て、甥等^{をひら つくし おく}を筑紫に送る。)

史料3前半の己卯条には、全部で50におよぶ連に宿禰姓が与えられた内のひとつに「猪使連」の名が見える。次いで癸未条には、齐明天皇6(660)年～天智天皇2(663)年にかけて、百済救援の戦役によって、唐に捕虜となった猪使連子首や筑紫三宅連得許らが、新羅の使者に送られて新羅経由で帰国したことが記されており、具体的に「猪使連」の存在を窺い知ることができる。

一方、天武天皇が稗田阿礼に誦習させていた「帝紀」「旧辞」をもとに元明天皇の命で太安万侶が撰した『古事記』(和銅5(712)年完成)⁽¹⁵⁾には、次のような記述がある。

[史料4] 下巻・安康天皇条

於是、市辺王之王子等、意祁王・袁祁王二柱聞此乱而逃去。故到山代苺羽井、食御糧之時、面黥老人来、奪其粮。爾其二王言「不惜粮。然汝者誰人。」答曰「我者山代之猪甘也。」故逃渡玖須婆之河、至針間国、入其国人・名志自牟之家、隱身、役於馬甘牛甘也。
(ここに、市辺の王の王子等、意祁王・袁祁の王(二柱)、この乱れを聞いて逃げ去りましき。かれ、山代の苺羽井に到りまして、御糧食す時に、面黥ける老人来て、その粮を奪ひき。しかして、その二はしらの王の言らししく、「粮は惜しまず。しかれども、なは誰人ぞ」答へ曰ひしく、「あは、山代の猪甘ぞ」かれ、玖須婆の河を逃げ渡りて、針間の国に至りまし、その国人、名は志自牟が家に入りまして、身を隠したまひて、馬甘牛甘に役はえましき。)

史料4は、雄略天皇(大長谷王)によって父(忍齒王)が殺され、その追っ手の追求を逃れた、後の仁賢天皇・顕宗天皇が、播磨国の志自牟の元まで逃げる途中で、「山代(城)の猪甘」と遭遇して食べ物(乾飯)を奪われた記述である。「山代の猪甘」は老人で、顔面に入れ墨が施されていたことが記されている。史料4では、命を守るために逃げ隠れる者から、食べ物を強奪するといった、「山代の猪甘」の浅ましい行動が読み取れる。

後の仁賢天皇・顕宗天皇が、「山代の猪甘」と遭遇した「山代の苺羽井」は、現在の京都府の木津川市山城町綺田あるいは城陽市水主と言われている。いずれも京都府南部の木津川沿いの地と考えられている。

[史料5] 下巻・顕宗天皇条

初天皇、逢難逃時、求奪其御粮猪甘老人。是得求、喚上而、斬於飛鳥河之河原、皆断其族之膝筋。是以、至今其子孫、上於倭之日、必自跛也。故能見志米岐其老所在、故其地謂志米須也。

(初め、天皇、難ひに逢ひて逃げましし時に、その御粮を奪ひし猪甘の老人を求めたまひき。ここに、求め得て、喚上げて、飛鳥河の河原に斬りて、みなその族の膝の筋を断ちたまひき。ここをもちて、今に至るまでに、その子孫、倭に上る日は、必自ず跛ぐぞ。かれ、能くその老の在るところを見しめき。かれ、そこを志米須といふ。)

史料5は、史料4をうけて、顕宗天皇が、「山代の猪甘」に仕返しをする記述である。顕宗天皇は、食べ物を強奪した老人である「山代の猪甘」を見つけ出して、飛鳥川の河原で斬り、「山代の猪甘」の一族すべての膝の筋を断ち切って、跛者にする体刑に処したことがわかる。その子孫が、上京する際に跛者のまねをする由縁も述べられている。この記述からは、「山代の猪甘」の浅ましい行動に対して、顕宗天皇の容赦のない怒りを読み取ることができる。報復場所となった「飛鳥河の河原」は、河内国の安宿(現在の大阪府羽曳野市飛鳥)を流れる川と考えられているが、「志米須」の現在地は特定されていない。

最後に、『播磨国風土記』⁽¹⁶⁾の記述を紹介したい。『風土記』は、和銅6(713)年に元明天皇により編纂の命が下り、それを受けて各国で編纂されたが、現存するのは5国しかない。『播磨国風土記』はその一つで、霊亀元(715)年までに編纂されたといわれている。

[史料6] 賀毛郡・山田里条

猪養野。右、号猪飼者、難波高津宮御宇天皇

之世、日向肥人、朝戸君、天照大神坐舟於、
猪持参来進之、可飼所求申作仰。仍所賜此処、
而放飼猪。故日猪飼野。

(猪養野。右、猪飼と号くるは、難波の高津
の宮に御宇しめしし天皇のみ世に、日向の
肥人、朝戸の君、天照す大神の坐せる舟に、
猪を持ち参来て進りて、飼ふべき所を求ぎ申
し仰ぎき。仍りて此処を賜りて、猪を放ち飼
ひき。故れ、猪飼野と曰ふ。)

猪養野の地名の由来に関する記述であるが、仁徳天皇の時代に、日向国（現在の宮崎県）に住む球磨地方（現在の熊本県南東部）の人である朝戸の君が、舟で猪（豚）を持参し献上したので、猪（豚）を飼養できる場所として、猪養野を賜ったことが記される。播磨国（現在の兵庫県南西部）の猪養野の地は、猪甘である朝戸の君が、九州の日向国（現在の宮崎県）から、猪（豚）とともに舟で移り住んだ飼養地（居住地）と考えられる。また、その飼養地（居住地）は、朝廷から下賜された土地であることから、猪甘が天皇の配下に属する部民でありえたことが十分に考えられる。さらに、猪甘の出自が、九州地方に求められることも理解できる。

以上、猪甘に関する主な記述を抜粋して紹介したが、次にこれら史料からわかることを列挙したい。

史料1・6からは、猪甘が、朝廷の猪（豚）を飼う部民であったと理解でき、史料2・4・6からは、猪甘の居住地（あるいは飼養地）が、現在の大阪市内や京都府南部、兵庫県南西部といった畿内とその周辺に存在していたことを窺い知ることができる。

また、史料4からは、猪甘が、容姿の特徴として顔面に入れ墨を施していたことが想像できる。史料5では、「山代の猪甘」が「跛者」の姿で朝廷に服従しなければならなくなったことが記されていることから、顔面に入れ墨と合わせて、彼らの身分的な問題が示唆でき、重要な記述といえる。

さらに、史料3によれば、天武天皇の時代になって、猪甘に「猪使連」という宿禰姓が与えられ、

「猪使連子首」といった百濟救援の戦役に労した「猪使連」の存在を窺い知ることができ、地位・身分の安定を得たことが想像できる。

3 考古資料の検討

次に、本論の中心となる考古資料に基づいた猪甘に関する検討を試みたい。

(1) 猪狩猟を表す人物像

獲物とした猪（豚）を腰に吊す人物埴輪がある。出土事例が極めて少なく、人物埴輪全体から見れば希有な存在ともいえるが、狩猟者（狩人）として理解されてきた¹⁷⁾。

5世紀後半～末に比定される3基の大型前方後円墳を中心に構成される関東地方の保渡田古墳群（群馬県高崎市）のうち、井出二子山古墳（墳長108.5mの前方後円墳）¹⁸⁾とその西側に隣接する保渡田Ⅶ遺跡¹⁹⁾、保渡田八幡塚古墳（墳長96.0mの前方後円墳）²⁰⁾から、小型の猪形資料（土製品状埴輪）を腰に吊す人物埴輪の存在が知られている。保渡田Ⅶ遺跡は、西側に隣接する井出二子山古墳に関連した溝で区画された突出遺構であるが、帆立貝式古墳とも考えられている。

井出二子山古墳及び保渡田八幡塚古墳からは、小型の猪形資料（土製品状埴輪）の部分のみが出土しているため、その全体像の把握は困難である（図1）。しかしながら、保渡田Ⅶ遺跡では、猪を腰に吊す人物埴輪の全体像を知り得ることができる。

保渡田Ⅶ遺跡から出土した猪を腰に吊す人物埴輪は、総高54.5cmの男子全身無脚立像で、頭部には鳥帽子状の被り物を被り、右腕を前方に、左腕を左斜め上方向に挙げた姿勢をとる。背中に剥落痕があり、鞆を背負っていた可能性が高いものと判断でき、両腕の姿勢からは、弓矢を引いていた姿（弓射の姿勢）が想像できる。腰紐の左前方に刀子を差し、背面に小型の猪形資料（土製品状埴輪・長さ12.0cm）を吊している。頭部と顔面、首、腕、腰紐を中心に赤色と黒色の彩色が施されている。

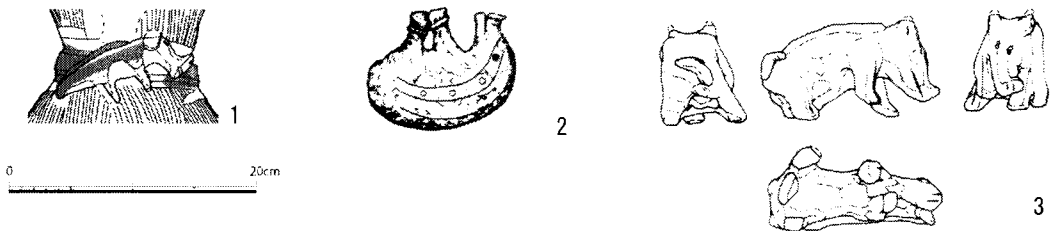
保渡田Ⅶ遺跡からは、豊富な種類の形象埴輪群（器財・人物・動物）が出土しているが、猪を腰に吊す人物埴輪と一連配列の可能性が高い資料としては、猪形埴輪1点の存在が窺える。保渡田Ⅶ遺跡から出土した猪形埴輪は、全長70.5cm、高さ49.5cmで、左側の背部に線刻による鉄鏃（木の葉状）、赤彩による血液（ただれ落ちる血）の表現が施されており、狩人によって手負いとなった猪（豚）を表したものと考えられる。また、保渡田Ⅶ遺跡からは、犬形埴輪2点が存在しており、猪を腰に吊す人物埴輪と手負いの猪形埴輪とともに、猪狩猟の場面を演出していたことが考えられよう（図2）。

保渡田Ⅶ遺跡のように、狩りの獲物である猪形埴輪を、狩猟者（狩人）の姿勢である犬形埴輪が追い詰めた場面を表したものと考えられる猪形埴輪と犬形埴輪による一連配列は、6世紀の古墳においても継続する。近畿地方の昼神車塚古墳（6世紀中頃、次節で詳しく検討）や、関東地方の剛志天神山古墳（墳長108.5mの前方後円墳・6世

紀後半・群馬県伊勢崎市）⁽²¹⁾などで確認でき、古墳時代の猪狩猟の場面を表した典型的なスタイルであるといえよう。

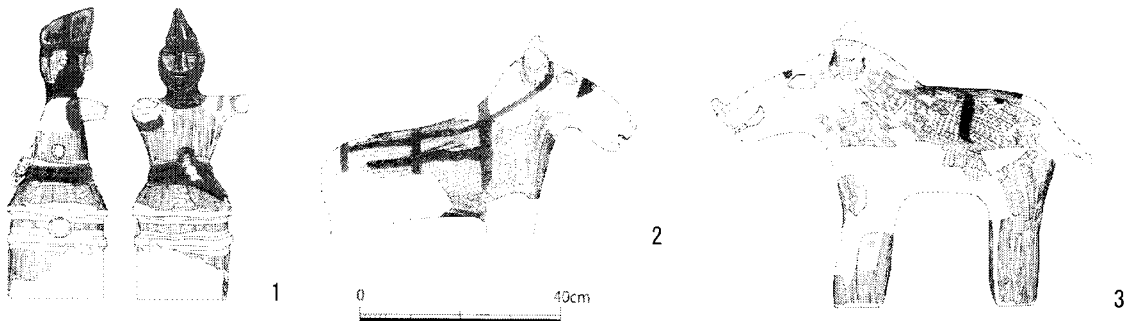
なお、狩猟者（狩人）を表した人物埴輪が確認できていない古墳においても、猪狩猟の場面を表したと考えられる猪形埴輪と犬形埴輪による一連配列が認められる場合が多い⁽²²⁾。近畿地方の荒蒔古墳（墳長30.0mの帆立貝式古墳・6世紀前半・奈良県天理市）⁽²³⁾などはその典型事例といえるが、本来は狩猟者（狩人）を表した人物埴輪が存在していた可能性も考えられよう。

埴輪以外で、猪（豚）と犬の組み合わせが認められる考古資料としては、近畿地方の梶2号墳（墳長37.0mの帆立貝式古墳・6世紀初頭・大阪府守口市）出土の須恵器装飾付壺（台付壺）が知られる⁽²⁴⁾。壺の肩部分を取り囲むように、首輪を付けた犬と猪（豚）、鳥の小像が付けられているが、猪（豚）と犬が一連となって配置されている状況は、猪狩猟の場面を表したものであることが想像できる（図3）。



1：保渡田Ⅶ遺跡 2：井出二子山古墳 3：保渡田八幡塚古墳

図1 人物埴輪が吊す猪形（註19・20文献から）



1：猪形を吊す人物埴輪 2：犬形埴輪 3：猪形埴輪

図2 保渡田Ⅶ遺跡の猪狩猟埴輪（註19文献から）



梶 2 号墳

図3 猪(豚)・犬の小像付須恵器(註23文献から)

(2) 角笛をもつ人物像

角笛を表した埴輪は、非常に希有な存在で、前述した塚田良道の研究によれば、昼神車塚古墳のほかに、関東地方の小幡北山埴輪製作遺跡E地区第2工房址(茨城県茨城町)からの出土事例が紹介されている⁽²⁵⁾。古墳に樹立された埴輪としては、昼神車塚古墳のみということになる。笛を吹く人物埴輪は、近畿地方の四条1号墳(一辺28～29mの造り出し付方墳・6世紀末・奈良県橿原市)でも報告されている⁽²⁶⁾。人物埴輪の口に、笛がはずれたような痕跡が残っている⁽²⁷⁾が、角笛かどうかは不明である。また、井辺八幡山古墳出土の角杯を背負う人物埴輪の角杯について、角笛である可能性が指摘されている⁽²⁸⁾が、吹き口の孔が表現されていないことから、否定的な意見もある⁽²⁹⁾。

本節では、古墳での樹立とその配列状況の検証が可能である昼神車塚古墳出土の角笛をもつ人物埴輪を中心に、検討を進めたい。

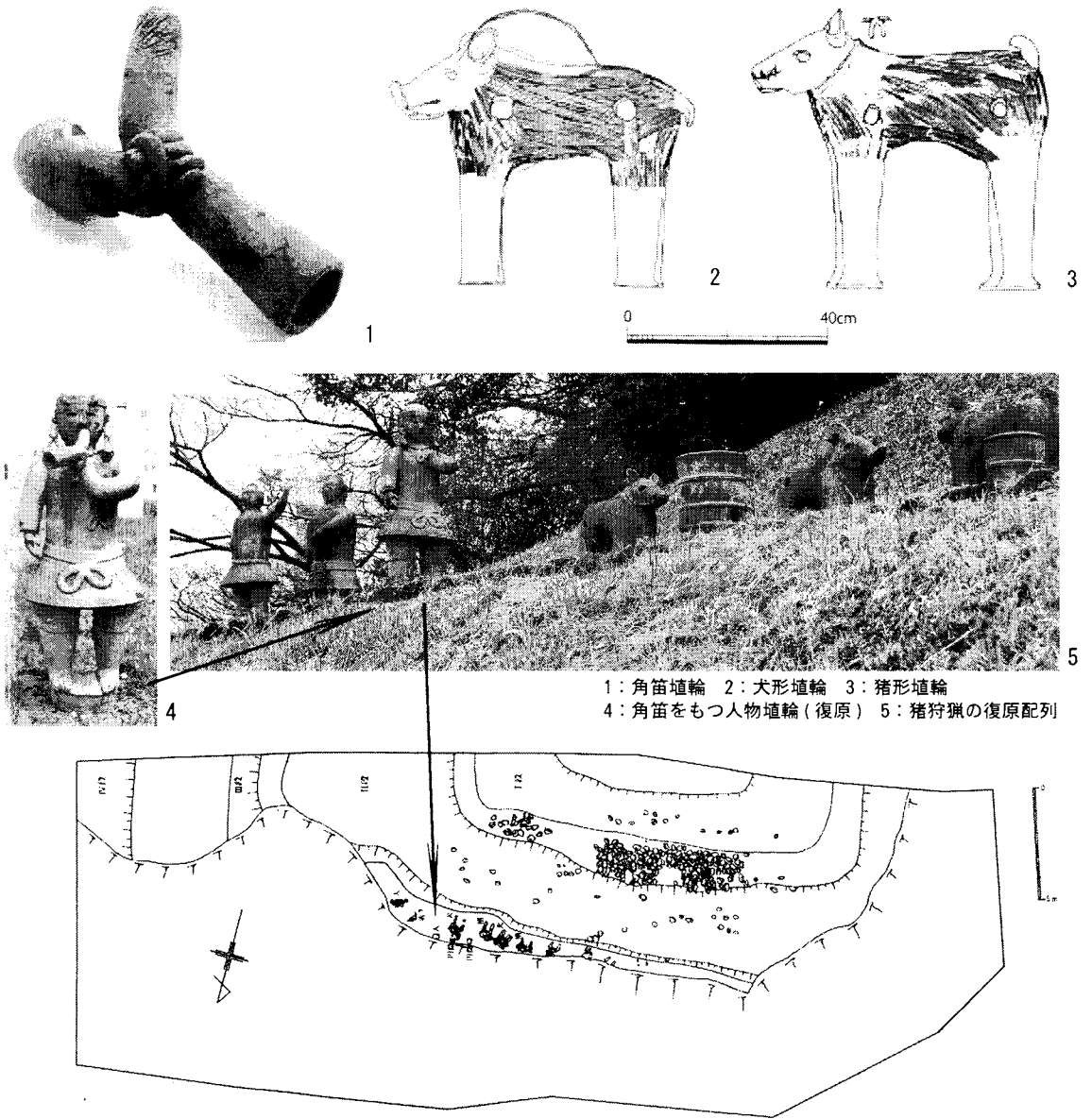
昼神車塚古墳は、3段築造の前方後円墳であるが、前方部の2段テラス面(17.0m×1.2m)に、多くの動物埴輪を含む形象埴輪が、列状に配置されていた状況が明らかになっている。その配列の東側の位置に、東側から西側に向かって、北(外)側を向いて樹立された力士埴輪などに続いて、角笛をもつ人物埴輪が、列状配置された動物埴輪列の方(西側)を向いて樹立されていた。角笛をもつ人物埴輪の西側(内側)の手前には、犬形埴輪2点(頭)によって、獲物である猪形埴輪1点(頭)が、挟み撃ちとなるような状態で配置されていたことが明らかになっており⁽³⁰⁾、さらにそ

の西側に向かって動物埴輪(残存は脚部のみ)による配列が続いていたことが解っている⁽³¹⁾。

角笛をもつ人物埴輪は、角笛とそれを握る手のみが残存するもので、湾曲した中空の角笛を、籠手らしきものを付けた左手で、親指を外側に向けて下方から握っている。円筒基部の台座上に直立した足のみが西側方向を向いて残っていたことが確認されており⁽³²⁾、推定男子全身立像であった可能性が高いものと判断されている⁽³³⁾。角笛をもつ人物埴輪の樹立された向きと位置、猪形埴輪及び犬形埴輪の配列された樹立状況(向きと位置)からは、猪狩猟の場面を表している可能性が高いものと考えられてきた⁽³⁴⁾。角笛をもつ人物埴輪の性格としては、勢子との指摘もなされている⁽³⁵⁾が、猪狩猟という性格を考えると、猪甘である可能性が十分に考えられよう(図4)。昼神車塚古墳の人物埴輪がもつ角笛は、「猪甘の角笛」である可能性が指摘でき、角笛が猪狩猟用として用いられていたことが想定できる。角笛が、古墳時代の日本で狩猟用として用いられていたことに関しては、既に岡崎晋明によって指摘されたことでもあるが⁽³⁶⁾、昼神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪については、塚田良道が提示した「武装軍団に關係する軍楽隊の一員」ではないものと判断できる⁽³⁷⁾。

また、前節で紹介した保渡田古墳群における猪狩猟者(狩人)の人物埴輪に関しても、猪甘である可能性が十分に考えられ、猪甘が狩猟にあたって、弓矢を使用していたことも想定される。この推論は、保渡田八幡塚古墳から出土した小型の猪形(土製品状埴輪)の考察にあたって、動物埴輪の多くが家畜を表しているものであることを根拠に、大場磐雄によって早い段階から指摘されてきたことでもある⁽³⁸⁾。

古墳時代の出土遺物として、現段階では角笛そのものの出土は確認されていない。しかしながら、前節及び本節の検討からは、猪甘が行う猪狩猟には、弓矢や角笛のほか、獵犬が用いられていたことが想定できた(表1)。



1: 角笛埴輪 2: 大形埴輪 3: 猪形埴輪
4: 角笛をもつ人物埴輪(復原) 5: 猪狩猟の復原配列

図4 屋神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪と猪形・犬形埴輪

(註 8b・8c・23 文献から・5 の写真は筆者撮影・一部加筆)

表1 猪形埴輪に関連する埴輪一覽

| 番号 | 出土地 | 古墳・遺跡名(所在名) | 墳形/規模 | 時期 | 人物埴輪/特徴 | 猪形埴輪 | 犬形埴輪 | 鹿形埴輪 | 特記 | 関連文献 |
|----|--------|-------------|----------------|-----|---------------------|------|------|------|---------------------------|---------|
| 1 | | 保渡田Ⅷ遺跡 | 突出遺構6号溝/— | 5c後 | 男子無脚立像/猪を腰に吊す狩人 | ○ | ○ | — | | 註19文献 |
| 2 | 群馬県高崎市 | 井出二子山古墳 | 前方後円墳/墳長108.5m | 5c後 | / (猪を吊す狩人) | (○) | (○) | — | 内規北部〇区・昭和5年出土 4脚を縛った猪形 | 註18文献 |
| 3 | | 保渡田八幡塚古墳 | 前方後円墳/墳長96.0m | 5c末 | / (猪を吊す狩人) | ○ | (○) | ○ | 昭和4年出土 | 註20文献 |
| 4 | 大府府高槻市 | 屋神車塚古墳 | 前方後円墳/墳長56.0m | 6c中 | (推定男子・双脚立像)/角笛をもつ狩人 | ○ | ○ | — | | 註8a・b文献 |

(3) 装飾古墳で描かれた狩猟図

前節までの検討の結果を補強する資料として、次ぎに装飾古墳で描かれた狩猟図を紹介したい。九州地方の五郎山古墳（墳径35mの円墳・6世紀後半・福岡県筑紫野市）の横穴式石室の奥壁上段には、小型獣に向かって馬上から弓射する騎馬人物図が、同心円文や人物図とともに描かれている。獲物の小型獣は、黒色のみの単色で表されるが、騎馬人物図は、黒色を主に輪郭を赤色で表している。馬の尻部には竿が付けられ、その上部に緑色で旗も表現されている（図5）。また、奥壁下段の東寄り中段には、黒色で描かれた体に、赤色の矢か槍が突き刺さった猪（豚）と想像できる動物が描かれている⁽³⁹⁾。この描写は、保渡田Ⅶ遺跡の猪形埴輪と共通する要素として指摘できる。

一方、東北地方の清戸迫76号横穴墓（7世紀前半・福島県双葉町）の奥壁では、大きな渦巻文を中心とした人物図や動物図が、赤色顔料だけで描かれている。渦巻文の下部に、狩猟図がある。清戸迫76号横穴墓の狩猟図では、獲物の猪（豚）や鹿、小型獣を目がけて弓矢を放った人物と小型の獣の間には、猟犬と想定される犬が描かれている。まさに、前節までに想定した猪狩猟のスタイルと同様の表現であることが理解できる（図5）⁽⁴⁰⁾。

さらに、同じ東北地方の泉崎4号横穴墓（7世紀前半・福島県泉崎村）の奥壁や側壁でも赤色顔料によって渦巻文と人物図や動物図が描かれているが、奥壁で描かれた人物図と動物図の中に、耳の長い獣に向かって、弓矢を引く騎馬人物が認められ、狩猟図と考えられている⁽⁴¹⁾。

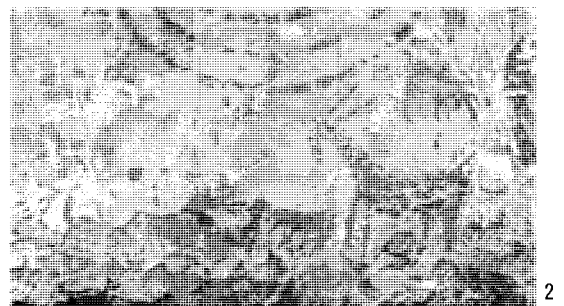
日本の装飾古墳で描かれた図では、写実性を欠いた抽象的な図文が多い。東海地方の兎沢9号墳（墳径6.0～7.5mの円墳・7世紀・静岡県焼津市）の奥壁下段に、線刻によって描かれた猪（豚）と想定される図などは、その代表例といえよう⁽⁴²⁾。しかしながら、ここで紹介した狩猟図は、明確に狩猟の場面を表現したものといえる。清戸迫76号横穴墓の狩猟図は、まさに前節までの検討で想定できた、猪狩猟に必要な弓矢と猟犬を備えたものであることが指摘できる。

次節では、猪甘の系譜をめぐる問題の検討を進めるため、比較分析の対象とする高句麗壁画古墳で描かれた狩猟図と角笛図などを呈示し、検討を進めたい。

(4) 高句麗壁画古墳で描かれた狩猟図と角笛図

日本の古墳時代における人物埴輪や装飾古墳の壁画に描かれた人物図などの比較研究の対象として、非常に有効性が認められる朝鮮半島の考古資料として、高句麗壁画古墳の壁画図がある⁽⁴³⁾。日本の装飾古墳と中国大陸や朝鮮半島の壁画古墳との比較研究については、その文化交渉や影響といった関連性を考察するうえで、非常に有効な手段であることが指摘でき、実践されてきている⁽⁴⁴⁾。

高句麗壁画古墳は、高句麗が二番目に都を置いた集安（中国吉林省集安市）と、三番目に都を置いた平壤周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡・平安道南浦市）で多く築かれており⁽⁴⁵⁾、王を中心とした高句麗の支配者層の墓である。初期の壁画に、生活風俗図及び狩猟図などが描かれる場合が多



1：五郎山古墳 2：清戸迫76号横穴墓

図5 装飾古墳の狩猟図（註39a・b文献から・一部削除）

く、4世紀以降になると、生活風俗図に加えて、仏教図（蓮華文）・四神図が盛んに描かれるようになる。6世紀に入ると、四神図のみが描かれるようになるのが大抵的な変遷の傾向である。

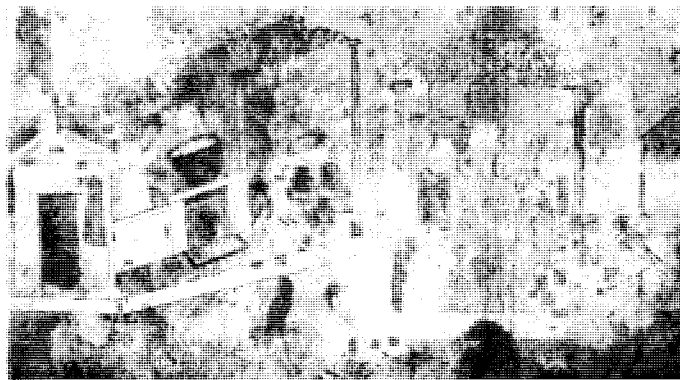
狩猟図が描かれた代表的な壁画古墳は、集安（中国吉林省集安市）の舞踊塚（一辺17mの方台形墳・4世紀末～5世紀初頭）及び長川1号墳（規模不明の方台形墳・5世紀中頃）、平壤周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡・平安南道南浦市及び龍岡郡）の安岳1号墳（南北17m×東西13mの方台形墳・4世紀末）及び薬水里古墳（規模不明の円形墳・4世紀末～5世紀初頭）、徳興里古墳（規模不明の方台形墳・5世紀初頭〔永楽18（408）年銘墓誌〕）、狩猟塚（別称：梅山里四神塚、規模不明の円形墳・5世紀末～6世紀初頭）などがある⁽⁴⁶⁾。舞踊塚及び長川1号墳では、鹿と虎を馬上から弓

射する冠状の被り物を被った人物による狩猟図が描かれる。長川1号墳では、前室と玄室による複室構造を呈する石室の前室左側壁で、走って逃げる猪（豚）の後方から、獲物を狙って馬上から弓射する人物と、猪（豚）の正面から槍を構えて獲物を狙う人物によって、猪（豚）が挟み撃ちとなる構図で描かれた狩猟図が見られる（図6）。この狩猟図の上位に、首輪を付けた走る犬及び前室北壁中央部付近で首輪を付けた座る犬が描かれているが、犬の向きや位置から、狩猟図の上位に描かれた野遊図に伴うものと判断できる⁽⁴⁷⁾。安岳1号墳では、鹿を馬上から弓射する狩猟図、薬水里古墳では、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物を中心とした大規模な狩猟図が描かれる。徳興里古墳では、前室と玄室による複室構造を呈する石室の前室南側天井で、虎を馬上から



図6 長川1号墳の狩猟図（註46a・c文献から）

1：壁画図 2：模写図



1：厨房と肉庫 2：吊された調理用の犬と猪（豚）

図7 安岳3号墳の厨房図・肉庫図（註46d・e文献から）

弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図、前室東壁天井で、鹿と猪（豚）と思われる獲物を、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図が描かれている。狩猟塚（梅山里四神塚）では、玄室西壁に2頭の獲物を馬上から弓射する小規模な狩猟図が描かれる。

高句麗壁画古墳の狩猟図では、大規模なものや小規模なものにかかわらず、鹿や虎といった大型獣を、馬上から弓射する描写が一般的といえる。馬上から弓射する弓に関しては、人物図から判断すると短弓（長さ約1.0m）である。高句麗壁画古墳の狩猟図で描かれた短弓に関しては、井辺八幡山古墳出土の挂甲武人像（人物埴輪）のもつ弓（人物埴輪から想定復原された弓の長さ約1.0m）などとの類似性が指摘されている⁽⁴⁸⁾。

猪（豚）の描写に関しては、平壤周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡）の安岳3号墳（南北33m×東西



図8 角坻塚の首輪付犬図（註49文献から）



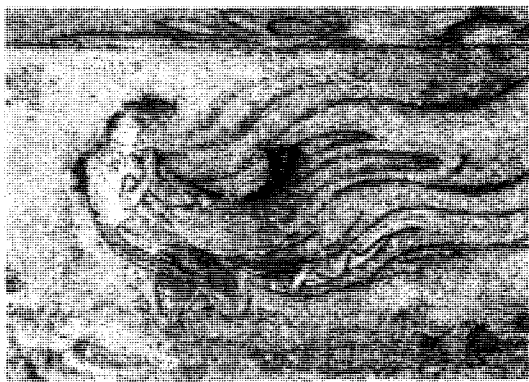
1

30mの方台形墳・4世紀後半〔永和13（357）年銘墓誌〕の前室東側室の東壁で、厨房で調理する女性の手前の肉庫の中に大きなフックで吊された調理用の猪（豚）が描かれている（図7）。肉庫の中には、他の調理用の動物も吊されており、犬と想定されるものもある。また、厨房と肉庫の間には2匹の犬が描かれる。犬の描写に関しては、徳興里古墳の前室南側天井で描かれた天の川図（牽牛織女の図）で、織女の後方に犬が描かれる。また、角坻塚（一辺15.0mの方台形墳・4世紀末・中国吉林省集安市）の前室と玄室の間の通路左壁に、口を開けて歯を見せる首輪を付けた犬が描かれている（図8）⁽⁴⁹⁾。首輪の表現から、よく飼い馴らされた犬であったことを窺い知ることができる。

高句麗壁画古墳の狩猟図では、乗馬スタイルで弓を使用した狩り（所謂流鏑馬スタイル）が基本で、猟犬の存在が認められない。また、捕獲及び飼養された猪（豚）は調理用で、その肉が食されていたことが理解できる。

一方、角笛図は、舞踊塚の天人図及び平壤周辺（北朝鮮平安南道南浦市）の江西大墓（一辺51mの方台形墳・6世紀末～7世紀初頭）の飛天図がよく知られている。

舞踊塚では、玄室の天井・奥側（隅三角持ち送り第4段側面・北側）で、吹奏角笛天人図が描かれる。舞踊塚の埋葬施設は、二室構造の石室であるが、玄室の天井は、3段の平行持ち送りの上に



2

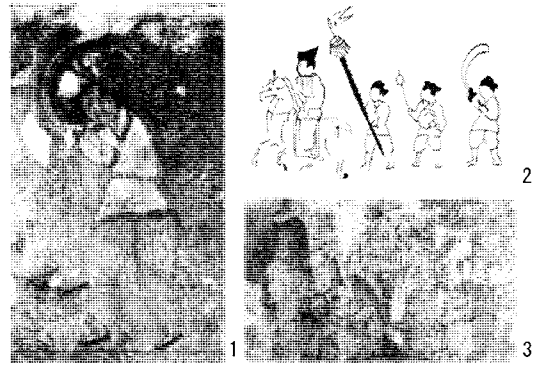
1：舞踊塚の天人図 2：江西大墓の飛天図

図9 神仙人の吹く角笛図（註46a・d文献から）

5段の隅三角持ち送りを八角形になるように狭めながら架構させた八角形構造で、壁面に漆喰が塗られ、その上に壁画が描かれている。前室及び通路、玄室の壁面には生活風俗図が描かれるが、天井には朱雀、青龍、麒麟、仙人、星宿、日象、月象などの天上の世界が描かれている。吹奏角笛天人図は、長い黒冠帽を被り、袖と裾の裂けた衣服をまとった細身で足長の天人が、長い曲がった角笛を両手でもって軽やかに吹く姿で、面長の顔面に八の字髭と巻き上げ髪（観音垂髪）が描かれる（図9）。吹奏角笛天人図は、仏教の影響を受けて描かれた道教的天人の表現と理解され、手にもつ長い曲がった角笛は、モンゴル及び中央アジア地方からの系統と考えられている⁽⁵⁰⁾。

江西大墓は、高句麗の封土墳としては最も規模が大きく、埋葬施設は、羨道と玄室のみで構成さ

れる単室構造である。漆喰は塗られずに、石室を構築する水磨きの施された花崗岩の上に直接壁画が描かれているのが特徴である。玄室の天井は、側壁の上に2段の平行持ち送りとその上に3段の



1: 角笛を吹く人物 2: 鼓吹楽隊 3: 行列の騎馬人物

図10 安岳3号墳の角笛図（註12〔原図：註52〕・46d文献から）

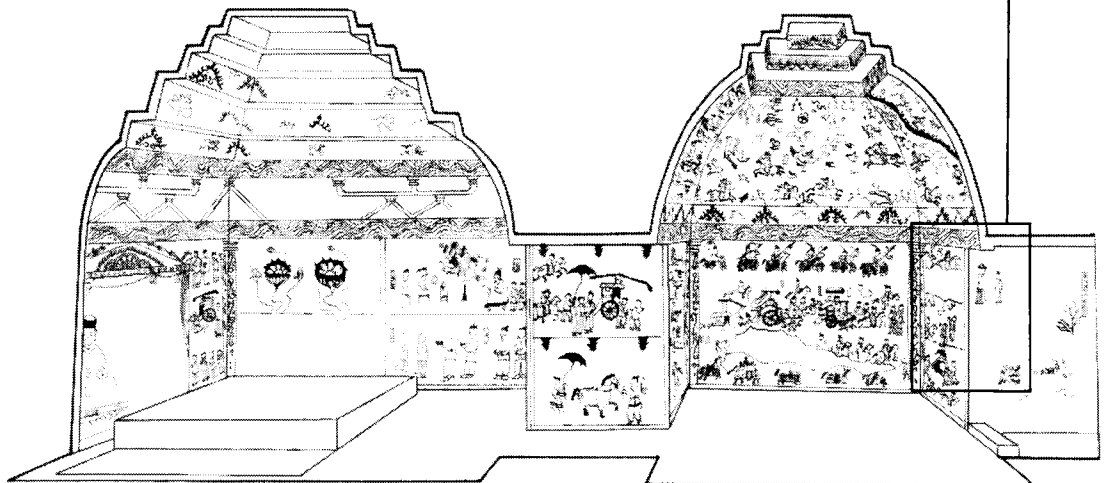
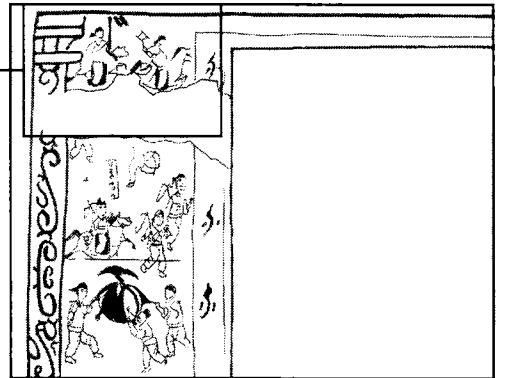


図11 徳興里古墳の鼓吹楽隊・騎馬角笛図（註46b文献から・一部加筆）

隅三角持ち送りによって架構させた構造で、天井・北側（平行持ち送り第2段側面・東側）で、吹奏（双）角笛飛天図が描かれている。江西大墓の飛天が両手に持って吹く角笛は、長い曲がった角笛であるが、口先部が二つに分かれるといった双又の角笛である（図9）。

以上が、高句麗壁画古墳の神仙図として描かれた代表的な角笛図であるが、高句麗壁画古墳で描かれた生活風俗図及び狩猟図などの描写の一部として、角笛を吹く人物の姿を垣間見る見ることができる。塚田良道の指摘した舞楽図、軍楽図などである⁽⁵¹⁾。

三室構造で側室や回廊を持った複雑な構造を呈する安岳3号墳の石室では、基本的に前室壁画は、上下二段の構成に分けられている。前室壁画で、剥落が著しい南壁西側の上段に、長く曲がった角笛を両手で握って吹く人物図がある。頭髪は何も被っていないのか、頭巾状のものを被っているのか不鮮明でよくわからないが、軽装の上下衣服に、靴をはいた姿で描かれている（図10-1）。この角笛を吹く人物図は、角笛で重奏をする姿とも理解されている⁽⁵²⁾。また、安岳3号墳の北側回廊東壁では、先頭の騎馬人物に続き、旗幟をかかげる人物、指鼓と鞞鼓を打つ人物、角笛を吹く人物で構成された隊列が描かれていることが指摘されており、鼓吹楽隊図として理解されている（図10-2）⁽⁵³⁾。安岳3号墳では、奥室東側回廊東壁に描かれた行列図の隊列後部で、小さな角笛を、左手で握って口元にあてがう騎馬人物の姿も見ることができる（図10-3）。

平壤周辺の薬水里古墳や徳興里古墳、竈神塚（規模不明の円形墳・5世紀初頭・北朝鮮平安南道龍岡郡）、大安里1号墳（南北22.5m×東西19.5mの方台形墳・5世紀初頭～中頃・北朝鮮平安南道龍岡郡）、八清里古墳（規模不明の円形墳・5世紀初頭～中頃・北朝鮮平安南道大同郡）では、複数の馬上人物とともに、甲冑などの装着がない軽装の人物が馬上で、長くて曲がった角笛をもって吹く姿が描かれている⁽⁵⁴⁾。徳興里古墳では、二室構造の石室の前室南壁・東側上段で、頭巾を

被った前方と後方の二人の馬上の人物が、前方では掉鼓をふり、後方では角笛を吹いて馬上行進する姿が描かれる（図11）。これらはいずれも鼓吹楽隊図として理解できるもので、高句麗では、角笛が軍楽器として一般的に使用されていたことが理解できる。

また、高句麗で使用されていた角笛は、大角笛・双大角笛・小角笛などに分けられ、その特性としては、立ったまま、歩きながら、騎馬しながらで、両手で持って吹くこと（小角笛を除く）、特に大角笛は音が大きくて、野外演奏に適することから、男性の吹いた管楽器として、弦楽器の玄琴や阮咸とともに、高句麗の基本楽器であったことが指摘されている⁽⁵⁵⁾。

次に、狩猟図に伴う角笛の描写を確認することができる薬水里古墳の狩猟図について、詳しく見ていきたい（図12）。

薬水里古墳の石室は、前室と玄室による複室構造を呈し、漆喰を塗った上に壁画が描かれているが、玄室には柱と梁が描かれ、北壁の梁の上に墓主夫妻と玄武、東壁に青龍と日象、西壁に白虎と月象、南壁に朱雀が描かれる。薬水里古墳では、前室の西壁を中心に、前述のとおり、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図が描かれている。薬水里古墳の狩猟図は、前室の西半部から西壁の上部全体を使用した大規模なもので、獲物である虎と熊、鹿といった大型獣を、馬上から狙って弓射する頭巾状の被り物を被った数基の騎馬人物が描かれている。その向かって右側に、狩猟を見守る配置で、中央に大きく描かれた騎馬人物を中心に、弓射する騎馬人物と同じ頭巾状の被り物を被った一連の隊列が描かれている。その後方の位置に、3人の騎馬人物が列をなして描かれているが、その最も後方にいる騎馬人物は手に角笛を持ち、馬上から吹き鳴らしているように見える。薬水里古墳の狩猟図からは、狩猟の際にも、角笛が使用されていたことが理解でき、角笛が狩猟用としての側面（性格）を有していたことが理解される。このことは、岡崎晋明による指摘の根拠となっている⁽⁵⁶⁾。

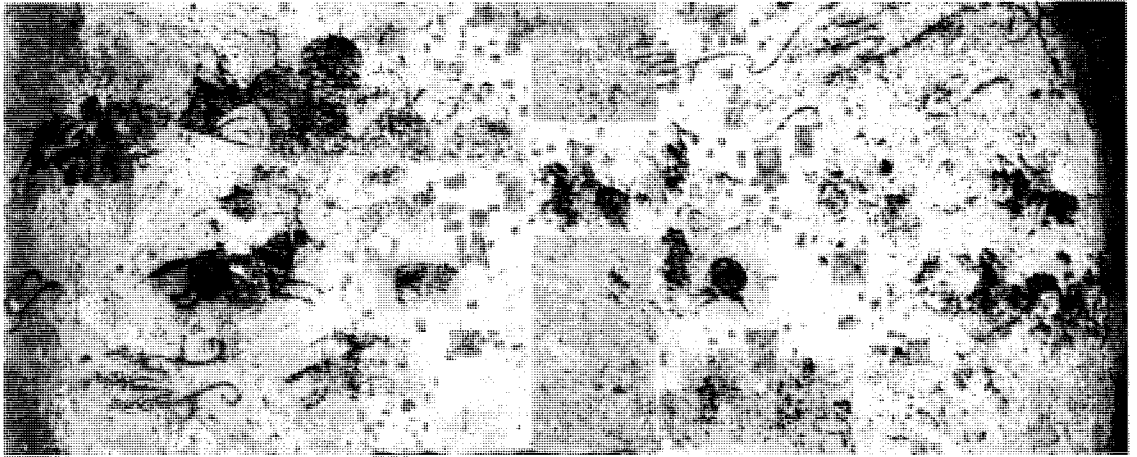


図 12 薬水里古墳の狩猟角笛図 (註 46a・50 文献から)

以上、高句麗壁画古墳での検討をまとめると、高句麗では、(1)狩りは、乗馬スタイルで弓を使用するのが基本で、猟犬の存在は認められない。(2)狩りの対象となる獲物は、虎や鹿、熊、猪(豚)などの大型獣である。(3)角笛は、軍楽器であるが、狩猟用としての使用も認められる。

次に、分析結果に基づき、比較検討を行っていきたい。

4 考古資料による比較検討—共通点と相違点の抽出—

形象埴輪を分析対象とした猪甘に関する検討(猪狩猟を表す人物像及び角笛をもつ人物像)からは、猪甘が行った猪狩猟では、道具として弓矢

や角笛が使用され、猟犬を伴う狩猟スタイルであったことが想定できた。

一方、高句麗壁画古墳の狩猟図からは、対象となる獲物は猪(豚)も含まれているが、虎や鹿を中心とした大型獣で、乗馬で弓矢を使用するのが基本といえる。また、大規模な狩猟では、角笛が使用されていたことが理解できた。

双方の共通点としては、獲物として猪(豚)を捕獲し、その道具として弓矢が使用されていたこと、そして角笛の使用である。相違点としては、5～6世紀(古墳時代中期～後期)の日本では猟犬を伴うのが一般的であるのに対して、4～5世紀の高句麗では馬を使用した弓射・乗馬スタイルが基本⁽⁵⁷⁾で、猟犬を伴わないということになる。

高句麗の狩猟の基本である弓射・乗馬スタイル

に関しては、『三国史記』巻第13・高句麗本紀第一・始祖東明聖王の建国神話の中で、「朱蒙知其駿馬、而減食令瘦、驚馬善養令肥。王以肥者自乘、瘦者給朱蒙。後獵于野、以朱蒙善射、与其矢少、而朱蒙殫獸甚多。」と記される。高句麗建国の祖である朱蒙は、駿馬やのろまな馬の特徴をよく知り、狩猟の際には、弓矢の名手だったので、少ない矢しか与えられなかったが、多くの獲物を捕らえたことが記されており、高句麗では馬と弓矢が一連のものとして重要視されていたことが理解できる。史料からも、高句麗では、弓射・乗馬スタイルが基本であったことを窺い知ることができる。

また、装飾古墳で描かれた狩猟図を見る限り、6～7世紀（古墳時代後期以降）の日本の狩猟においては、弓射・乗馬スタイルが認識でき、双方の相違点としては、獵犬の有無ということになる。

犬を伴った猪狩猟に関しては、『播磨国風土記』託賀郡・都麻里条に、「伊夜丘者、品太天獺犬名麻奈志漏。与猪走上此岡。天皇、見之云、「射乎」。故曰伊夜丘。此犬、与猪相闘死。即作墓葬。故、此岡西有犬墓。」と記述されており、この記述は、獵犬に関する記事としてよく知られている⁽⁵⁸⁾。応神天皇が猪狩猟の際に、麻奈志漏という名前の獵犬を伴って狩りを行い、猪との格闘によって、麻奈志漏が死んでしまったので、墓を作って弔ったことが記されている。この記述からは、猪狩猟に、獵犬が用いられたことが一般的であったことを窺い知ることができる。また、『日本書紀』巻第16・武烈天皇8（506）年3月条では、「及此時、穿池起苑、以盛禽獸。而好田獵、走狗試馬。」とも記述されている。狩り場を作って、鳥や獸（動物）を飼って、獵犬を走らせ馬を試し乗りしたことが記されており、5～6世紀（古墳時代中期～後期）の日本の狩猟では、犬を伴うことが、普通のことであったといえる。

中国大陸の北方系民族の鮮卑などでは、犬は狩猟の道具として認識されていた⁽⁵⁹⁾。また、現在の北朝鮮では、獵犬である豊山犬が、重要天然資源（特別天然記念物）に指定されている。豊山犬は、虎・鹿・猪狩猟などに用いられた朝鮮半島原

産の獵犬である。豊山犬の獵犬としての歴史が、いつ頃まで遡ることが出来るのかは定かではないが、獵犬を用いた狩猟が、朝鮮半島で定着化していたことは確かと言える⁽⁶⁰⁾。

比較検討によって導かれた、獵犬の有無という相違点に関しては、狩猟方法の根本的な違いとして認識できるが、前述のとおり、高句麗で必ずしも狩猟の際に、獵犬の使用がなかったと言い切れず、双方の狩猟方法の大差とはいえないように思われる。

犬に関しては、前述した安岳3号墳の厨房図で、高句麗では犬の肉を、調理用として一般的に食していたことが理解できる。一方、『日本書紀』巻第29・天武天皇4（675）年4月条に「自今以後、制諸漁獵者、莫造檻穿、及施機槍等之類。…（略）…。且莫食牛・馬・犬・猿・鶏之肉。…（略）…若有犯者罪之。」との記述があり、狩猟や漁労を生業とするもの者に対する捕獲方法の禁止に加え、牛や馬・猿・鶏・猪（豚）の肉とともに犬の肉を食することが禁じられ、犯す者を処罰することが記されている⁽⁶¹⁾。このことから、4～5世紀の高句麗と同様に、7世紀後半（飛鳥時代）の日本でも犬の肉が食されていたことを窺い知ることができ、犬の肉を食することも双方の共通点であったと理解できる⁽⁶²⁾。

次に、角笛に関する比較検討の結果を述べていきたい。

高句麗壁画古墳で描かれた角笛のほとんどが、長くて湾曲する形状を呈しており、角笛を持つ人物は、両手でしっかりと持って、吹いている。ここで検討の対象とした高句麗壁画古墳で描かれた角笛のほとんどが、その形状から判断して、安岳3号墳の騎馬行列図（小角笛）を除いて、大角笛であったといえる。大角笛は、鼓吹楽隊（軍楽器・徳興里古墳など）での使用と、狩猟時（薬水里古墳）の使用において、明確な相違は認められず、同様の形状のものが使用されていたことが判断でき、その大きさと曲線の形状から、ほとんどが水牛の角を加工したものと考えられる。

一方、昼神車塚古墳の人物埴輪の持つ埴輪角笛

の大きさや曲線の形状は、大角笛を表したのではなく、小角笛に近い形状のものと判断できる。推定復原された角笛をもつ人物埴輪は、角笛を左手だけの片手で持って吹いている(図4)。その形状から、水牛の角ではなく、黄牛の角を加工したものと考えられる。今城塚古墳(墳長190mの大型前方後円墳・6世紀後半・大阪府高槻市)の埴輪祭祀場4区出土の牛形埴輪(図13)の角を見る限り、僅かに曲がった短い角であることがわかる⁽⁶³⁾。離島であるがゆえに生き残った在来牛である見島牛(国指定天然記念物・山口県萩市)や口之島牛(鹿児島県十島村)の角も、僅かに曲がった短い角である(図14)。牛の角は、洞角とも呼ばれ、前頭骨の角突起が芯となって、鞘状の角表皮(爪のようなもの)で被われ、年齢を重ねるごとに、角輪(年輪)が形成されて、角は生涯成長を続ける⁽⁶⁴⁾。この角表皮の部分が、角笛とし

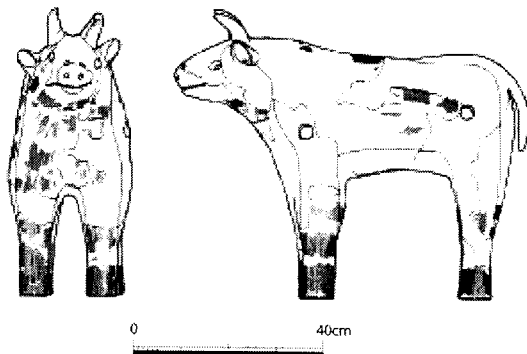


図13 今城塚古墳の牛形埴輪(註63文献から)

て利用されている。日本の在来牛は体高1.2m前後で、牛としては小柄牛であるが、DNA分析では、ホルスタイン種に近い北方系の牛が起源とされている⁽⁶⁵⁾。

昼神車塚古墳の人物埴輪で表現された猪甘が使用した角笛は、小角笛(図15)と推定でき、古墳時代の日本では大角笛の存在を見ることできない。

5 まとめ—猪甘の特性と角笛の系譜—

以上、文献史料の記述と、考古資料にもとづき実施した比較分析の結果から、本論のまとめとして、猪甘の特性及び角笛の系譜に関する考察を行いたい。

まずは、猪甘の特性について考えていきたい。5～6世紀(古墳時代中期～後期)の猪甘による



図14 見島牛(筆者撮影)

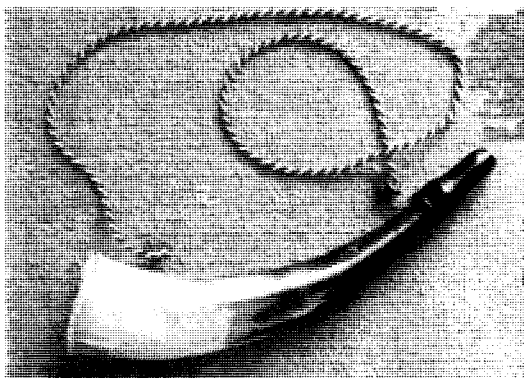


図15 現代の小角笛(長さ約22cm・スイス製・筆者撮影)



図16 ニホンイノシシ(筆者撮影)

猪狩猟の方法は、道具として弓矢、勢子として獵犬を使用するのが一般的であったことが理解でき、4～5世紀の高句麗で見られるような、基本的に馬を使用した狩猟スタイルではなかったことが指摘できる。また、猪甘が飼養した猪（豚）は、その肉が調理され、天皇や猪甘の属する首長層の宴に献じられたことが想像できる。『播磨国風土記』の記述からは、播磨国（現在の兵庫県南西部）の猪甘の出自が、九州地方に求められることが想定できるが、本論での分析及び比較検討の結果からは、猪甘が飼養した猪（豚）や、その飼養・飼育技術の系譜に関しては、わからなかった。

『三国志』巻第30・烏丸鮮卑東夷伝・挹婁条に、「其俗好養猪，食其肉，衣其皮。冬以猪膏塗身，厚数分，以禦風寒。」という記述がある。挹婁は北東アジア（現在の中国東北部及びロシア沿岸地方）を居住地とした民族で、猪（豚）を盛んに飼い慣らして、その肉を食料、皮を衣服とし、冬は猪（豚）の膏を身体に塗って、風や寒さを防いでいたことが記されており、猪（豚）の飼養が盛んであったことを窺い知ることができる。また、「作溷在中央，人圉其表居」とも記述され、挹婁は、村の中央に溷という猪（豚）小屋と便所を兼ねた小屋を作っていたことも窺い知ることができる。この記述は、森浩一が、古墳時代の日本で飼養された猪（豚）と、中国大陸の北方系民族との関連性を指摘した根拠のひとつにもなっている⁽⁶⁶⁾。

中国大陸の中で、家畜化された猪（豚）が、日本にもたらされたのは古墳時代以前で、弥生時代といわれている⁽⁶⁷⁾。野生猪と家畜豚は、そのすべてが、「イノシシ種」と呼ばれる共通種で、アジアを生息地とするものは、「アジアイノシシ系」と呼ばれ、「クチヒゲイノシシ」といった別名のとおり、口から頬にかけて淡色の帯があることが知られている。日本では、亜種としてニホンイノシシ（図16）やリュウキュウイノシシが知られるが、家畜化したという証拠はなく、在来豚と呼ばれるトカラ豚（鹿児島県十島村）や喜瀬豚（鹿児島県奄美市）なども、中国大陸で家畜化された猪（豚）が南方から入り、離島で維持されてきたも

のといわれている。猪（豚）の家畜化は、ヨーロッパや西アジア、中国などの各生息地で並行して行われたと考えられており、その年代を特定することが困難とされている⁽⁶⁸⁾。現状の科学分析の手法では、猪（豚）の系譜を証明することは難しいようである。

弥生時代の銅鐸に施された絵画資料に目を向けると、東京国立博物館所蔵の銅鐸（6区袈裟樽文銅鐸・伝香川県出土）に、6匹の獲物の中心にいる猪（豚）に向けて、弓矢を向ける人物の図（図17）がある。また、近畿地方の桜ヶ丘遺跡（兵庫県神戸市）出土の1号銅鐸（2区流水文銅鐸）などでは、2匹の鹿、2人で脱穀する人物に続き、弓を持つ人物、2匹の犬、走り去る2匹の鹿が一連で構成された図（A面）があり、背面（B面）に施された図の構成（弓を持つ人物、矢が刺さった鹿を押さえる人物、2匹の鹿など）も含めて、狩猟の場面を描いたものとして知られている⁽⁶⁹⁾。これらの絵画資料からは、2世紀以前の弥生時代の日本で、猪狩猟や獵犬を伴った狩猟が、一般的に行われていた状況を窺い知ることができる。

日本への家畜化された猪（豚）の渡来は、その飼養・飼育の方法をよく知り得た者や、飼養・飼育の知識や方法を知り得た集団とともに、一連となって渡来したことが考えられ、古墳時代に成立した猪甘の源流（祖先）と考えられる。猪甘は、先に検討を行った馬飼や鷹甘（飼）⁽⁷⁰⁾とは、渡

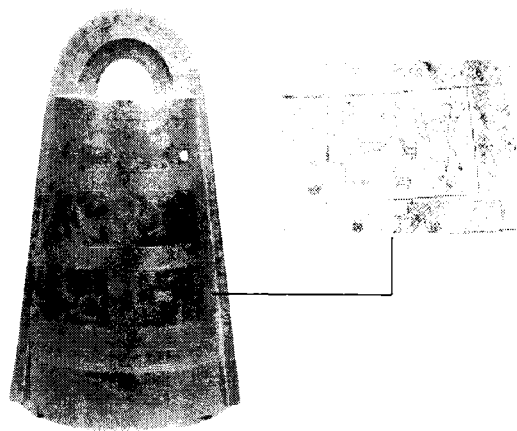


図17 銅鐸の狩猟図（註69文献から・一部加筆）

来の時期も含めて、その系譜や要因、定着の仕方が大きく異なることが指摘できる。

次に角笛であるが、高句麗壁画古墳で描かれた角笛の検討からは、高句麗では大角笛が、主に鼓吹楽隊で軍楽器として使用されていたことが理解できる。4～5世紀を中心とした多くの壁画古墳で、角笛を伴う鼓吹楽隊図が描かれていることから、その定着がなされていたことは明らかである。

『三国志』巻第30・烏丸鮮卑東夷伝・高句麗条には、「漢時賜鼓吹技人」や「其民喜歌舞，國中邑落，暮夜男女群聚，相就歌戲」といった記述がある。高句麗では、漢の時代に、楽隊が下賜されたこと、民衆は歌舞を喜び、国中の集落では、夕暮れから夜になると男女が集まって、歌い遊ぶ、といった風俗があったことを窺い知ることができる。高句麗で、角笛などを使用した鼓吹楽隊による軍楽が、定着していた背景には、「其民喜歌舞」といった高句麗のもともとの風俗との関連性も考えられる。

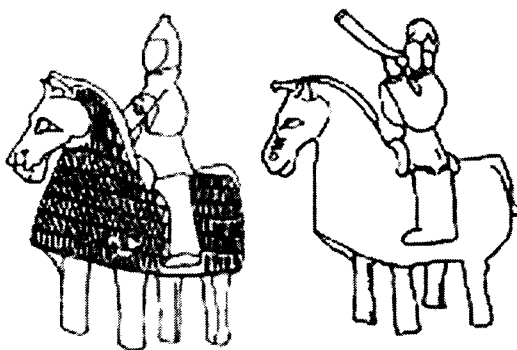
また、中国大陸の考古資料では、4世紀中頃の後趙墓である可能性が高い、草廠坡1号墓（中国陝西省西安市）出土の騎馬楽俑で、角笛を両手でもって吹く騎馬人物俑が知られている（図18-1）⁷¹⁾。また、5世紀後半の南朝墓である鄧県彩色画像磚墓（中国河南省鄧州市）出土の鼓吹楽隊の画像磚で、先端に幡を付けた角笛を吹く人物の姿が、半肉彫りで描かれていることが知られている

（図18-2）⁷²⁾。4世紀中頃以降の中国大陸中央部においても、角笛が、鼓吹楽隊の軍楽器として使用されていたことが理解できる。

4～5世紀の朝鮮半島北部（高句麗）では、明らかに吹奏楽器として、角笛が定着していたことが理解でき、軍楽での使用を中心に、薬水里古墳の狩猟図が示すとおり、狩猟用としても使われていたことは明らかである。昼神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪については、軍楽隊の一員としての姿を表したのではなく、猪甘の姿を表したものと理解できる。

6世紀後半（古墳時代後期）の日本で、猪甘が、猪狩猟に使用していた角笛の系譜については、朝鮮半島に求めることができよう。このことは、高句麗壁画古墳の検討から、疑いようのないことが考えられる。埴輪で表された角笛は、国内で製作されたものとするより、朝鮮半島諸国（高句麗・百済など）からの渡来品であった可能性が高いものといえる。日本国内では、角笛の製作が定着した痕跡を認めることが出来ない。その理由としては、在来牛を見る限りでは角が短くて、40～70cmの長さを有する水牛や黄牛の角と違って、素材として適したものでなかったことや、以下のような理由が考えられる。

天平宝字元（757）年に施行された養老律令の軍防令には、39軍団置鼓条に「凡軍団，各置鼓二面・大角二口・少角四口，通用兵士，分番教習」といった取決めがあり、44私家鼓鉦条には「大角、



1



2

1：草廠坡1号墓の騎馬角笛俑 2：鄧県彩色画像磚墓の鼓吹楽隊図

図18 中国大陸の角笛を表した考古資料（註71b・72文献から）

少角」の記述が見られることから、大角笛や小角笛が、古代日本の律令軍隊において、必要不可欠の道具であったことを窺い知ることができる。また、天平宝字3（759）年以後の成立とされる『万葉集』においても、高市皇子尊城上殯宮之時に柿本朝臣人麿が詠んだ歌中に、「鼓之音者…（略）…小角乃音母」という一節が見受けられる。8世紀後半の律令体制化の古代日本では、明らかに大角笛や小角笛の存在を窺い知ることができ、太鼓とともに、軍隊での必要不可欠な道具（軍楽器）であったことが理解できるが、それ以前の5～6世紀の大和王権を中心とした古墳時代社会では、軍隊での必要不可欠な道具（軍楽器）として定着していなかったことが、その理由として考えられるのではないだろうか。

また、12世紀（平安時代）以降の日本で、角笛の定着が発達し得なかった要因のひとつとして、日本産出の最大級の巻貝を利用した、法螺貝の使用があげられよう。

6 おわりに

本論では、昼神車塚古墳から出土した角笛をもつ人物埴輪を中心に、猪甘の特性と角笛の系譜に関して、人物及び動物埴輪、装飾古墳の図文、そして高句麗壁画古墳で描かれた図像を中心とした比較検討を行い、その結果をもとに、文献史料による解釈を得て考察を試みたが、猪甘の特性に至っては、その系譜を含めて、非常に難しい問題であることを痛感した。

森浩一は、既にこの問題に対して、昭和47（1972）年に、猪甘は東アジア全体の中で考究すべきであることを示したが⁽⁷³⁾、日本への家畜化された猪（豚）の渡来とその定着過程の究明は、まさに大きな課題であるといえる。森浩一の提示したとおり、家畜化した猪（豚）の問題は、東アジア世界全体の中で考究すべきことであるといえ、中国・朝鮮・日本とその周辺地域といった広域的な資料分析の必要性が指摘でき、今後の課題といえる。

稲作の伝来は米食、猪（豚）の家畜化は肉食といった、人間の生きる糧となった食料確保に関する重要事項で、現在の食生活に通じる食文化の根底となる問題である。猪（豚）の飼養に関する歴史学としての究明は、稲作の伝来と定着過程にも匹敵するものといっても過言ではないように思う。稲作は、プラント・オパール分析といった科学分析方法の確立によって、日本では縄文時代晩期（約2,000年前）まで遡ることがわかっており、既に周知化しているが、家畜化した猪（豚）の問題に関しては、今後の課題といえよう。

今後も継続して、考古資料の分析を中心にした、日本海を交流路とした渡来文化の究明に努めていきたい。

【註】

- (1) 西本豊弘・新美倫子編『事典 人と動物の考古学』吉川弘文館、2010。
- (2) a. 瀧川政次郎「猪甘部考（上）」『日本歴史』第272号、吉川弘文館、1971、pp.77～99。
b. 瀧川政次郎「猪甘部考（下）」『日本歴史』第273号、吉川弘文館、1971、pp.108～123。
- (3) 森浩一「第6章主要な遺物の考察」『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室、1972、pp.299～343。
- (4) 西本豊弘「ブタと日本人」『人と動物の日本史1 動物の考古学』吉川弘文館、2008、pp.215～225。
- (5) 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ・埴輪』雄山閣、1998、pp.108～150。
- (6) a. 亀井正道「人物・動物はにわ」『日本の美術』第346号、至文堂、1995。
b. 紀伊風土記の丘管理事務所編・発行『はにわー埴輪と古墳時代一』、1991。
c. 若狭徹『はにわの世界—古代社会からのメッセージ—』、(株)東京美術、2009。
- (7) 若松良一「狩猟を表現した埴輪について」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武蔵古代文化研究会、2004、pp.113～173。
- (8) a. 昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要（現地説明会資料）』、1978。

- b. 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報(1976年版)』29, 日本考古学協会, 1978, pp.64~67 (図版17~18).
- c. 高槻市立今城塚古代歴史館編・発行『高槻市立今城塚古代歴史館常設展示図録』2012.
- ⁽⁴¹⁾ 佐伯茂樹『カラー図解 楽器の歴史』河出書房新社, 2008.
- ⁽⁴⁰⁾ 黒沢隆朝『楽器の歴史』音楽之友社, 1956.
- ⁽⁴¹⁾ 岡崎晋明「角笛をもつ人物埴輪」『かしこうけん友史』第1号, 奈良県立橿原考古学研究所友史会, 1992, pp.16~18.
- ⁽⁴²⁾ 塚田良道「埴輪の軍楽隊」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1994, pp.79~100.
(塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007に再録)
- ⁽⁴³⁾ 字体は, 原則常用漢字で表すようにした.
- ⁽⁴⁴⁾ 『日本書紀』の読み下し及びその解釈は, 小島憲之ほか校注『新編日本古典文学全集3 日本書紀①~③』小学館, 1996を参考にし, 仁徳天皇から西暦を合わせて記載するようにした.
- ⁽⁴⁵⁾ 『古事記』の読み下し及びその解釈は, 山口佳紀・神野志隆光校注『新潮日本古典文学全集1 古事記』小学館, 1997を参考にした.
- ⁽⁴⁶⁾ 『播磨国風土記』の読み下し及びその解釈は, 植垣節也校注『新編日本古典文学全集5 風土記』小学館, 1997を参考にした.
- ⁽⁴⁷⁾ a. 千賀久『特別展はにわの動物園—関東の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1990.
b. 千賀久『はにわの動物園』保育社, 1994.
c. 若狭徹『もっと知りたいはにわの世界—古代社会からのメッセージ—』東京美術, 2009.
- ⁽⁴⁸⁾ 若狭徹ほか『史跡保渡田古墳群井出二子山古墳』高崎市教育委員会, 2009.
- ⁽⁴⁹⁾ 若狭徹『保渡田VII遺跡』群馬町教育委員会, 1990.
- ⁽⁵⁰⁾ 若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000.
- ⁽⁵¹⁾ 橋本博文「埴輪祭式論—人物埴輪出現後の埴輪配列をめぐって—」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980, pp.337~368.
- ⁽⁵²⁾ 註7文献に同じ.
- ⁽⁵³⁾ 千賀久『特別展はにわの動物園II—近畿の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1991.
- ⁽²⁴⁾ 註23文献に同じ.
- ⁽²⁵⁾ 註8文献に同じ.
- ⁽²⁶⁾ 西藤清秀・林部均「橿原市四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1987年度』奈良県立橿原考古学研究所, 1990, pp.289~327.
- ⁽²⁷⁾ 註11文献に同じ.
- ⁽²⁸⁾ 註11文献に同じ.
- ⁽²⁹⁾ 註12文献に同じ.
- ⁽³⁰⁾ 国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003.
- ⁽³¹⁾ 註8文献に同じ.
- ⁽³²⁾ 註8文献に同じ.
- ⁽³³⁾ 註26文献に同じ.
- ⁽³⁴⁾ 註30文献に同じ.
- ⁽³⁵⁾ 註7文献に同じ.
- ⁽³⁶⁾ 註11文献に同じ.
- ⁽³⁷⁾ 註12文献に同じ.
- 塚田良道は, 角笛と太鼓を持つ人物埴輪について, 武装軍団に関係する軍楽隊の一員である可能性を示し, 角笛と太鼓を軍楽器として理解し, 古墳時代に軍楽隊が成立していたことを述べるが, 角笛が, 狩猟や政治的儀式の場で使用されたことを考慮しておく必要も述べており, 狩猟での使用を完全に否定しているわけではない.
- ⁽³⁸⁾ 大場磐雄「猪—その考古学」『日本歴史』第272号, 吉川弘文館, 1971, pp.100~105.
- ⁽³⁹⁾ a. 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993.
b. 小田富士雄『国史跡 五郎山古墳—保存整備事業に伴う発掘調査—』筑紫野市教育委員会, 1998.
- ⁽⁴⁰⁾ a. 斎藤忠編『古墳の絵画(日本の美術第110号)』至文堂, 1975.
b. 榊見弘『装飾古墳』泰流社, 1977.
c. 斎藤忠「装飾古墳図文の意義」『斎藤忠著作選集3 古墳文化と壁画』雄山閣, 1997, pp.145~247.
d. 註39a文献に同じ.
- ⁽⁴¹⁾ 註40c文献に同じ.
- ⁽⁴²⁾ 斎藤忠「兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について」『笛吹段・兎沢古墳群』駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所, 1984, pp.66~68.
- ⁽⁴³⁾ a. 基峰修「馬飼について—日本列島における古墳時代渡来文化の検証—」『人間社会環境研究』第28号, 金沢大学大学院人間社会環境研究科,

- 2014, pp.127~145.
- b. 基峰修「鷹甘の文化史的考察—考古資料の分析を中心として—」『人間社会環境研究』第30号, 金沢大学大学院人間社会環境研究科, 2015, pp.195~212.
- c. 基峰修「力士考—考古資料分析による扁平鬘の解釈—」『人間社会環境研究』第32号, 金沢大学大学院人間社会環境研究科, 2016, pp.85~104.
- (44) 斎藤忠『裝飾古墳・図文からみた日本と大陸文化』日本書籍, 1983.
- (45) 全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文化と思想』明石書店, 2013, pp.307~324.
- (46) a. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
- b. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986.
- c. 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988.
- d. 共同通信社編・発行『高句麗壁画古墳』, 2005.
- e. 共同通信社編・発行『世界遺産 高句麗壁画古墳展』, 2005.
- f. 南秀雄（財団法人大阪市文化財協会文化財研究部）編・発行『図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の特性と被葬者の出自の研究（平成17年度~平成19年度科学研究費補助金基礎研究（C）研究成果報告書）』, 2007.
- (47) a. 註46a文献に同じ。
- b. 陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓群報告集（吉林省文物考古研究所編著）』科学出版社, 2009, pp.65~85.
- (48) 註8文献・註16b文献に同じ。
- (49) 池内宏・梅原末治『通溝』巻下, 日満文化協会, 1940.
- (50) 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- (51) 註12文献に同じ。
- (52) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古研究所編（呂南喆・金洪圭訳）『高句麗の文化』同朋舎出版, 1982.
- (53) 註52文献に同じ。
- (54) a. 註12文献に同じ。
- b. 註49文献に同じ。
- (55) 註52文献に同じ。
- (56) 註11文献に同じ。
- (57) 高句麗では、鷹狩りでも乗馬スタイルが認識できる。註43b文献に同じ。
- (58) a. 西本豊弘「狩猟」『古墳時代の研究4 生産と流通 I』雄山閣, 1991, pp.121~128.
- b. 真壁延子『日本の犬・歴史散歩』文芸社, 2002.
- (59) 西澤治彦「食事文化史からみた中国の南北」『武蔵大学人文学会雑誌』第36巻第4号, 武蔵大学人文学会, 2005, pp.95~119.
- (60) デズモンド・モリス『デズモンド・モリスの犬種事典』誠文堂新光社, 2007.
- (61) 中西武尚ほか『日本犬聞録—イヌと人の歴史—』大分市歴史資料館, 2015.
- (62) 犬肉の食習慣は、古代中国でも戦国時代~漢代まで盛行していた。
- a. 桂小蘭『古代中国の犬文化』大阪大学出版会, 2005.
- b. 註59文献に同じ。
- (63) 今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館, 2015.
- (64) 註1文献に同じ。
- (65) 馬の博物館・牛の博物館編『馬と牛』馬事文化財団・牛の博物館, 2006.
- (66) 註3文献に同じ。
- (67) 註1文献に同じ。
- (68) 田中智夫『アニマルサイエンス4 ブタの動物学』東京大学出版会, 2001.
- (69) 錦田充子『銅鐸の中の動物たち』荒神谷博物館, 2010.
- 桜ヶ丘遺跡出土の1号銅鐸（2区流水文銅鐸）は、同一鑄型で作られたものが4例ある。桜ヶ丘遺跡出土の銅鐸が最も古く、次に、推定製作順に記す。辰馬No405号銅鐸（辰馬考古資料館所蔵・出土地不明）、新庄銅鐸（国立歴史民俗博物館所蔵・滋賀県出土）、辰馬No404号銅鐸（辰馬考古資料館所蔵・出土地不明）、泊銅鐸（東京国立博物館所蔵・鳥取県出土）
- (70) 註43文献に同じ。
- (71) a. 楊泓（網干善教監訳・来村多加史翻訳）『中国古兵器論叢』関西大学出版部, 1985, 図版拾貳。
- b. 蘇哲「西安草廠坡1号墓の年代と鹵俑簿の組合せについて」『中国考古学』第2号, 日本中国考古学会, 2002, pp.120~126.
- (72) 河南省文化局文物工作隊『鄧県彩色画像磚墓』北九州中国書店, 1981.
- (73) 註3文献に同じ。